

## 拘置所 30日間、看守たちの夜間調教 ～囚われの身体が求めた背徳の快楽～

1. 目次
2. 第1話「囚人番号 447、身体検査を開始する」
3. 第2話「夜の独房、規律違反の代償」
4. 第3話「看守室、奉仕という名の支配」
5. 第4話「シャワールーム、濡れた背徳」
6. 第5話「夜勤室、三者三様の調教」
7. 第6話（最終話）「釈放前夜、完全なる墮落」

### 第1話「囚人番号 447、身体検査を開始する」

護送車の後部座席は、想像していたよりも狭かった。手錠の金属が手首に食い込み、わずかに動かすたびに冷たい感触が肌を這う。水瀬蓮は俯いたまま、窓の外を流れる景色を見ることもできずにいた。

どうしてこんなことになったのか。

友人の連帯保証人になったのが運の尽きだった。相手が夜逃げし、蓮に請求が来た。返済できるはずもなく、気づけば警察に連行され、三十日間の拘留が決まった。弁護士は「短期だから」

と慰めたが、蓮にとって三十日は永遠のように思えた。

「到着だ」

運転していた警官の声で、蓮は顔を上げた。灰色の建物が視界に入る。三階建ての無機質な構造。窓には鉄格子。ここが――これから一ヶ月過ごす場所。

車を降りると、秋の冷たい風が頬を撫でた。もう二度と自由に風を感じられないのではないかという不安が、胸を締め付ける。

玄関で別の職員に引き継がれ、蓮は建物の中へと導かれた。廊下は消毒液の匂いが充満している。靴音だけが響く。

「こちらです」

案内されたのは、受付のような部屋だった。カウンター越しに中年の職員が書類に目を通している。

「囚人番号 447、水瀬蓮。本日より三十日間の拘留です」

警官が書類を手渡す。職員はちらりと蓮を見て、無表情のまま頷いた。

「了解しました。こちらで引き取ります」

手錠が外される。ようやく解放されたと思ったのも束の間、今度は別の職員——若い男性が蓮の腕を掴んだ。

「身体検査を行います。ついてきてください」

有無を言わさぬ口調。蓮は抵抗する気力もなく、引きずられるように廊下を歩いた。

やがて、『検査室』

と書かれたプレートのついたドアの前で止まる。職員がドアを開け、蓮を中に押し込んだ。

「失礼します」

部屋の中には、すでに二人の男がいた。

一人は、がっしりとした体格の男。短髪で鋭い目つき。制服を着ているが、どこか威圧感がある。もう一人は、茶髪で柔和な顔立ちの若い男。こちらは笑みを浮かべているが、その笑顔はどこか冷たい。

「囚人番号447、水瀬蓮だ」

職員が告げると、がっしりとした男——桐生が頷いた。

「了解。こちらで引き継ぐ。下がっていい」

職員が部屋を出ていく。ドアが閉まる音が、やけに大きく響いた。

蓮は二人の男に挟まれ、立ち尽くすしかない。

「初めまして、447。私は夜間主任の桐生だ。こちらは神崎」

桐生が淡々と自己紹介する。神崎は軽く手を振った。

「よろしくね、蓮くん。ああ、ここでは番号で呼ぶのが規則だけど、二人きりのときは名前で呼んであげる」

神崎の声は優しいが、なぜか背筋が寒くなる。

「これから身体検査を行う。規則だから、抵抗しないように」

桐生の言葉に、蓮は喉の奥が渴くのを感じた。

「あの……身体検査って……」

蓮が震える声で尋ねると、桐生は冷たく答えた。

「拘置所内に危険物や禁制品を持ち込ませないためだ。徹底的に検査する。脱げ」

「え……」

「早くしろ。時間がない」

桐生の声に、有無を言わさぬ圧力がある。蓮は震える手で、シャツのボタンに手をかけた。

シャツを脱ぐ。ベルトを外す。ズボンを下ろす。下着姿になったところで、蓮は動きを止めた。

「全部だ。447」

桐生が言う。蓮は顔を赤くして俯いた。

「……お願いします、これ以上は……」

「規則だ。従え」

神崎が近づいてきて、蓮の肩に手を置いた。

「ねえ蓮くん、抵抗すると罰則があるんだよ。独房行きになっちゃう。大人しくしてれば、すぐ終わるから」

優しく囁く声が、逆に恐怖を煽る。蓮は震えながら、下着を下ろした。

冷たい空気が肌を撫でる。全裸になった蓮は、両手で股間を隠した。

「手を頭の後ろに組め」

桐生の命令。蓮は唇を噛みながら、言われた通りにする。

全身が二人の視線に晒される。蓮は羞恥で顔が熱くなるのを感じた。

「まず、口腔検査だ。口を開ける」

桐生が手袋をはめながら近づいてくる。蓮は小さく口を開いた。

「もっと大きく。舌を出せ」

蓮は抵抗する気力もなく、言われるがままに舌を突き出した。桐生の指が口の中に入ってくる。ゴム手袋の冷たさと、ぬるりとした潤滑剤の感触。

「んっ……」

喉の奥まで指が入り込んでくる。蓮は咳き込みそうになるのを必死で堪えた。

「歯の裏、舌の下……よし、問題ない」

桐生が指を引き抜く。蓮は大きく息を吸った。

「次は耳、鼻……」

桐生が小型のライトで耳の穴や鼻の穴を調べる。まるで物を扱うような冷たさ。

「よし。じゃあ次は……全身だ。四つん這いになれ」

「……え？」

蓮が聞き返すと、神崎が笑った。

「ほら、早く。床に手と膝をついて、お尻を上げて」

蓮は震えながら、床に手をついた。四つん這いの姿勢。尻が宙に浮き、全てが丸見えになる。

「いい子だね。じゃあ、もっと腰を上げて。そう、顔は床につけて」

神崎が蓮の腰を掴み、強制的に尻を高く突き上げさせる。顔が床の冷たいタイルに押し付けられる。

「ん……っ」

羞恥で身体が震える。この姿勢は——あまりにも恥ずかしい。

「足を開け。もっと」

桐生の声。蓮は涙目になりながら、膝を左右に開いた。

「よし……それでは、肛門の検査を始める」

その言葉に、蓮の身体がびくりと震えた。

「ま、待ってください……そんな……」

「規則だ。抵抗するな」

桐生の冷たい声。そして——ゴム手袋をはめた指が、蓮の尻たぶを掴んだ。

「ひっ……」

尻たぶが左右に広げられる。最も恥ずかしい場所が、完全に露出する。

「……綺麗なピンク色だな」

桐生が呟く。蓮は羞恥で身体が熱くなるを感じた。

そして——ぬるりとした冷たい液体が、穴に塗りつけられる。

「んっ……」

潤滑剤だ。桐生の指が、ゆっくりと穴の周りをなぞる。

「力を抜け。入れるぞ」

蓮が息を吸い込んだ瞬間、桐生の指先が穴に押し当てられた。

「あ……っ」

ゆっくりと、指が中に侵入してくる。括約筋が抵抗するが、桐生の指は容赦なく奥へと進む。

「んん……っ、やっ……」

「動くな。検査中だ」

桐生の指が第二関節まで入る。蓮は顔を床に押し付けたまま、必死で耐えた。

「……締めりは良好。異物は……ない、な」

指が中でゆっくりと動く。蓮は身体が震えるのを止められない。

「ん……あ……っ」

「ほう……ここか？」

桐生の指が、ある一点を押した。

「ひあっ……！」

蓮の身体がびくんと跳ねる。今まで感じたことのない感覚が、腰から全身に広がる。

「前立腺だ。ここを刺激されると……男は気持ちよくなる」

桐生が淡々と説明しながら、その場所を何度も押す。

「やっ……やめ……っ、あっ……」

蓮の性器が、意思に反して膨らみ始める。

「おや、反応してるね」

神崎が蓮の前に回り込み、しゃがみ込んだ。蓮の顔を覗き込む。

「やだ、かわいい顔してる。涙目で……すごくそそるよ」

神崎が蓮の頬を撫でる。蓮は視線を逸らすことしかできない。

桐生の指が抜かれる。蓮はほっとしたが、すぐに次の言葉が告げられた。

「次は性器の検査だ。仰向けになれ」

蓮は震えながら、身体の向きを変えた。仰向けになり、天井を見上げる。

桐生が蓮の股間に手を伸ばす。

「んっ……」

性器を掴まれる。蓮は思わず腰が浮きそうになるのを堪えた。

「サイズを測る。神崎、記録しろ」

「はい」

神崎がタブレットを取り出す。桐生が蓮の性器を持ち上げ、定規を当てた。

「平常時.....7センチ。包茎は.....」

桐生が皮を剥く。亀頭が露出する。

「仮性だな。剥ける」

「了解一。仮性包茎、平常時7センチっと」

神崎が楽しそうに記録する。蓮は羞恥で顔を背けた。

「次は勃起時のサイズを測る。勃起させるぞ」

「え.....ちょ、待って.....」

「動くな」

桐生の手が、蓮の性器を握る。そして――上下にゆっくりと動かし始めた。

「んっ.....あ.....っ」

蓮は唇を噛んで、声を堪えた。しかし身体は正直で、刺激に反応して徐々に硬くなっていく。

「ほら、もう大きくなってきた」

神崎が蓮の顔を覗き込む。

「感じちゃってるんだ。かわいいね」

「やめ.....て.....」

蓮が涙声で懇願するが、桐生の手は止まらない。むしろ速度が上がる。

「んっ.....あ.....あっ.....」

蓮の性器は完全に勃起した。硬く反り返り、先端から透明な液体が滲み出る。

「勃起時.....14センチ。平均的だな」

桐生が定規を当てて測る。蓮は羞恥で死にそうになった。

「じゃあ次は……感度テストだ」

「か、感度……？」

「各部位を刺激して、反応を記録する。動くなよ」

桐生が蓮の亀頭を親指で擦る。

「ひっ……あっ……」

敏感な場所を刺激され、蓮の腰がびくんと跳ねる。

「亀頭への反応、良好。次は……」

桐生の指が、性器の裏筋を撫でる。

「んん……っ」

蓮は身体を振るが、桐生の手は逃がしてくれない。

「裏筋も敏感だな。では……尿道は？」

桐生の指先が、先端の穴に触れる。

「やっ……だめ……っ」

「だめじゃない。検査だ」

指先がわずかに穴に入り込む。蓮は身体を震わせた。

「尿道も敏感。これは……開発すれば面白そうだな」

桐生が意味深に呟く。蓮は恐怖で身体が固まった。

「次は……睾丸だ」

桐生が蓮の玉袋を掴む。軽く揉みながら、指で一つ一つ確認する。

「んっ……あ……」



「睾丸のサイズ、問題なし。次は……」

桐生の指が、蓮の会陰部を押した。

「ひあっ……！」

「ここも敏感だな。会陰部への刺激……反応良好」

蓮はもう限界だった。全身が熱く、呼吸が荒い。性器は硬いままで、先端からは透明な液体が糸を引いている。

「最後は……射精反応のテストだ」

「え……」

蓮が聞き返す間もなく、桐生の手が再び蓮の性器を握った。

「ちょ、待って……だめ……っ」

「我慢しろ。記録が必要だ」

桐生の手が、激しく上下に動く。蓮は堪えようとしたが、すでに限界まで高められた身体は抵抗できない。

「やっ……あっ……あ、だめ……出……っ」

「出すな。まだ記録の準備が……」

神崎がカメラを構える。

「ダメだって言ってるのに……ほら、出ちゃう……」

蓮の身体が硬直する。そして――

「あっ……ああっ……！」

白濁した液体が、勢いよく噴き出した。一発目が自分の腹部に飛び散る。二発目、三発目と続き、桐生の手を汚す。

「ん……はぁ……はぁ……」

蓮は放心状態で、天井を見上げた。身体から力が抜ける。

「射精量……多いな。粘度も問題なし」

桐生が淡々と記録する。神崎はカメラで蓮の姿を撮影している。

「ねえ蓮くん、すごくいい顔してるよ。ほら、見て」

神崎がタブレットの画面を蓮に見せる。そこには——全裸で股を開き、精液にまみれて呆然としている自分の姿が映っていた。

「やっ……消して……」

「ダメだよ。これは記録だから。ちゃんと保存しておくね」

神崎が嬉しそうに笑う。

「身体検査、終了だ。神崎、447を独房に連れて行け」

「はい」

神崎が蓮の腕を掴む。蓮は抵抗する気力もなく、引きずられるように立ち上がった。

「囚人服を着ろ」

桐生が灰色の囚人服を投げてよこす。蓮は震える手で、それを身につけた。

「じゃあ、案内するね。蓮くん」

神崎が蓮の肩を抱く。蓮はふらふらとした足取りで、検査室を後にした。

廊下を歩きながら、蓮は混乱していた。今起きたことが信じられない。あれは本当に……検査だったのか？ それとも……。

「ねえ蓮くん、これから三十日間、よろしくね」

神崎が耳元で囁く。

「毎晩……楽しもうね」

その言葉に、蓮の背筋に冷たいものが走った。

これは.....まだ始まりに過ぎないのだ。

独房の扉が開く。蓮は中に押し込まれ、扉が閉まる音を聞いた。

狭い部屋。ベッドと便器だけ。窓には鉄格子。

蓮はベッドに崩れ落ちた。

身体はまだ熱く、さっきの感触が消えない。股間がじんじんと疼く。

なんで.....なんで自分は、あんなに感じてしまったのか。

蓮は両手で顔を覆った。涙が溢れる。

でも——その涙が、悔しさだけではないことに、蓮自身も気づいていた。

恐怖と混乱の中に、僅かに——ほんの僅かに、身体が求めてしまった快樂の残り香があった。

それが何よりも、蓮を苦しめた。

明日からどうなるのか。あの二人は、また自分に何をするのか。

不安と恐怖、そして——言葉にできない期待が、蓮の心を支配した。

夜は長く、眠れそうになかった。

(第1話 完)

第2話「夜の独房、規律違反の代償」

消灯時刻は午後九時だった。

蓮は薄暗い独房の中、硬いベッドに横たわっていた。天井を見つめながら、今日起きたことを反芻する。

身体検査——という名の屈辱。

あれは本当に正規の手続きだったのだろうか。桐生の冷たい手つき。神崎の歪んだ笑顔。そして、自分の身体が見せた反応。

蓮は両手で顔を覆った。

思い出すたびに、股間がじんじんと疼く。あの時、確かに——快楽を感じてしまった。恥ずかしくて、悔しくて、でもそれを否定できない。

身体が熱い。

シャワーも浴びさせてもらえず、囚人服の下の肌には汗と精液の名残が張り付いている。気持ち悪いのに、その感触がまた妙に生々しくて、意識が身体に向いてしまう。

ダメだ。考えるな。

蓮は寝返りを打った。壁に向かって丸くなる。

明日からは作業があると聞いた。他の囚人たちとの共同生活。普通に過ごせば——あんなことは二度と起きないはずだ。

そう自分に言い聞かせる。

でも——神崎の最後の言葉が、頭から離れない。

『毎晩……楽しもうね』

あれは何を意味していたのか。

蓮は目を閉じた。眠らなければ。明日に備えなければ。

しかし、緊張で身体が強張っている。呼吸が浅い。心臓の音が耳に響く。

どれくらい時間が経っただろう。

ふと——廊下から足音が聞こえた。

蓮は身体を硬くした。

足音は近づいてくる。そして——自分の独房の前で止まった。

鍵が回る音。

ドアが開く。

蓮は息を呑んだ。振り返ることができない。恐怖で身体が動かない。

「447」

低い声。桐生だ。

蓮は震えながら、ゆっくりと顔を上げた。

薄暗い独房の入口に、桐生が立っていた。制服姿。懐中電灯を手に持っている。

「起きているな」

桐生が淡々と言う。蓮は喉が渇いて、声が出ない。

「規律違反だ。消灯後は就寝しなければならない」

「え……でも……」

蓮が言い訳しようとする、桐生は一歩部屋に入ってきた。

「起きているということは、何か問題があるということだ。指導が必要だな」

桐生がドアを閉める。鍵をかける音が、やけに大きく響いた。

「ちょ、待ってください……私は……」

「立て」

桐生の命令に、蓮は震えながらベッドから降りた。

桐生が懐中電灯を棚に置く。薄明かりが天井に反射し、部屋をぼんやりと照らす。

「壁に手をつけ」

「え……」

「早くしろ」

有無を言わさぬ口調。蓮は足を引きずるように壁に近づき、両手を壁についた。

「足を開け。腰を突き出せ」

蓮は涙目になりながら、言われた通りにする。この姿勢は――昼間、あの検査室でやらされたのと似ている。

「いい子だ」

桐生が背後に立つ。蓮の背中に、桐生の体温が近づくのを感じる。

「あの……桐生さん……私、何も……」

「黙れ」

桐生の手が、蓮の腰に触れた。囚人服の上から、ゆっくりと撫でる。

「昼間の検査で分かった。お前は……敏感だ」

「そんな……」

「否定するな。データがある」

桐生の手が、蓮の尻を掴む。

「ひっ……」

「この尻も……触られるだけで震えている」

桐生の指が、尻たぶの形をなぞる。服の上からでも、その感触が生々しい。

「やめ……」

「やめろ、とは言わせない。これは指導だ」

桐生の手が、囚人服のズボンの裾に手をかける。

「あの……お願いします……」

「声を出すな。他の房に聞こえたら、お前が罰せられる」

桐生が耳元で囁く。蓮は唇を噛んだ。

ズボンが下ろされる。下着も一緒に。

冷たい空気が肌を撫でる。蓮は恥ずかしさで顔が熱くなった。

「昼間も見たが……やはり、いい尻だな」

桐生の手が、剥き出しの尻たぶを撫でる。今度は直接。指の感触が、肌に刻み込まれる。

「んっ……」

蓮は声を堪えた。でも、小さな吐息が漏れてしまう。

「敏感だ。触られただけで、こんなに反応する」

桐生の指が、尻たぶの間に入り込む。

「ひっ……あ……」

「声を出すなと言っただろう」

桐生のもう片方の手が、蓮の口を塞ぐ。

「んー……んん……」

蓮は声を出せない。桐生の手の平が、唇を覆っている。

「いい子だ。このまま静かにしている」

桐生の指が、蓮の穴に触れた。

蓮の身体がびくんと震える。

「昼間も触ったが……まだ何も入れていない穴だ。これから……開発してやる」

桐生の声が、やけに冷静で恐ろしい。

ポケットから何かを取り出す音。蓮は恐怖で身体が固まった。

そして——ぬるりとした冷たい液体が、穴に塗りつけられる。

「んっ……んん……」